

新緑の季節になると、記念館の庭が広がる。

お隣の朝日新聞東大阪支局の移転にともない、跡地を購入した。三百余平方メートルの敷地が広がり、自宅、庭、駐車場と一体化することになる。

庭は小さいながら記念館を構成する大切な要件だ。司馬遼太郎は雑木林が好きで、夏には生い茂る雑草も抜かず、秋から冬にかけては落ち葉も積もるままにまかせて自然のたたずまいを楽しんでいた。



庭の緑の種類は多く、樹木ではクス、シイ、クヌギ、カエデ、ヤマモモ、エゴノキなど、花木では、バラ、ボケ、ツバキ、ヤマブキ、アシビ、クチナシなどがある。草花では、豪華な花よりも野に咲く花を好み、ツユクサ、タンポポ、ナノハナ、ツワブキ、カタクリなどが季節に合わせて可憐な花をつける。

来館された方々は、この庭を通る小径にしたがい数々の作品が誕生した書斎の前をへて安藤忠雄さんが設計した建物に向かう。ここには司馬遼太郎の蔵書の一部、約二万冊の資料本を収納する大書架がある。

新しい庭は書斎の前あたりで、今ある樹木や草花と同じ種類のを植え違和感のないようにしたい。そのうえで中央部は芝生とベンチを置き、静寂のなかで休憩できる空間を提供しようと思った。

もともと、記念館は見るというより感じることに重きを置いている。司馬遼太郎の生活の場であった庭、作品を生んだ創造の空間ともいえる書斎、そして、蔵書の大書架、この三つの空間で、来館者をご自由に何かを感じ取られて、しばらく、何かを考える時間をもってもらえないか、という思い描いている。

そういう時間を持っていただく場は多く、広くあった方がいい。庭を拡大しようとしたのはそのためである。かつて関東からこられた年配の女性が「武蔵野の面影があって落ち着きます」と言われた。そのことを大切にしたい。

私には文化は共有すべきもの、という考えがあって、多くの人々にこの記念館の存在を知っていただき、記念館でお感じになったり考えたりされたことを、心の片隅においていただければ、ゆるやかな文化の輪が広がっていくように思っている。うれしいことに、記念館には多くのボランティアの皆さんが活動して支えてくださっている。



寒さや暑さの中でも正門に立って来館者を迎え、展示スペースでの監視やもぎり、庭木の手入れにも加わってください。

昨今、滅入ることの多い世の中であって、こういった心の輪が、記念館を軸に明るい道筋をつくってくれるのではないかと、文化という力を信じたい。

写真提供・司馬遼太郎記念財団